

# シヤンティ

shanti

2012  
夏  
7月号

サラーム、  
アフガニスタン

特集





# 道

巻頭言

## アフガン難民キャンプで 出会った少年

理事 秦辰也

2001年9月11日。同時多発テロ事件のあの日、私はバンコクにいた。同僚からの知らせに、一瞬状況が呑み込めなかつた。翌月から米英軍の報復攻撃が始まり、「テロとの戦い」の幕が切つて落とされた。

国際援助関係者は、新たに大量のアフガン難民がパキスタン側に逃れてくるだろうと予測した。私も地元NGOと協力して10月末には現地入りし、ペシャワール周辺で救援物資の配布を開始した。その後も度々パキスタンを經由し、国境の難民キャンプやカイバル峠を越えてアフガン東部のパルシヤ族の村などで食料配布に立ち会った。荒涼とした大地と険しい岩山。そこにはカラシニコフを肩にした少年兵の姿もあった。「インシヤラー(神の御心のままに)」。かつてガンダーラ文明の中心だったこの地には、厳格なイスラームと保守的な慣習が深く浸透している。緑の大地に仏教が息づ

くインドシナとは明らかに違う。何百年もタイムスリップしたような感覚だった。ある日の午後、国境沿いのシヤルマン難民キャンプを訪ねた時のことだった。10代前半で自分の息子ぐらいの少年が近づいてきた。彼は執拗にパシトゥン語で話しかけてくる。通訳が、「おじさん、仕事を僕にくれといっている」という。脇には年老いた男性とまだあどけない男の子が立っている。ハツとした。てっきり物乞いだと思込んでいた。なぜ仕事が欲しいのか彼に尋ねると、カブールにいた両親や親戚が米英軍の空爆で亡くなり、残された祖父と弟の面倒を見るためだという。少年の純

粋な眼差しが、羞恥心を抱いていた胸をえぐった。あれから10年。戦争や無差別テロは今も続いている。国連の推定では、過去5年の民間人犠牲者は1万2000人以上。ISAF(国際治安支援部隊)の戦死した兵士数は10年で約3000人(うち米兵1910人)にも達する。タリバン兵などを加えれば、さらに数字は膨らむ。一体いつになれば戦火は止むのか。そして難民キャンプで出会ったあの少年は、今何をしているのだろうか。

**SVAの使命**  
私たちは、地球上の貧困や戦争、内紛、環境破壊、災害などによって苦しむ人々のそばに立ち、苦しみを分かち合い、その人々と共に解決のための活動を行います。特にアジアにおける教育・文化活動を通じて、「共に生き、共に学ぶ」ことができるシャンティ(平和)な社会の実現をはかります。

**Cover Photo**  
「この答え、わかる人？」図書館活動のゲームの時間、活発に指名する小さな子。答える児童たちも一緒に楽しめます。ジャララバード市内の女子校にて。(写真:安井浩美)



⑦村のお菓子屋さん。サツマイモとマンゴーを揚げたおやつを売っています  
⑧奨学生の家庭を訪問  
⑨前回の移動図書館で覚えたダンスを披露してくれる男子と園児。  
移動図書館が来ると、保護者や住民たちも集まってきました



①カレン族の村は山中  
②木に道をふさがれ、移動図書館車が立ち往生。村人が倒木をかたづけられて宿舎にたどり着きました  
③山あいの保育園に移動図書館車が着きました  
④活発に走り回っていた3歳の男子。ページの開閉を繰り返して、一時間、絵本の前を離れませんでした  
⑤カレン族保育士リーダーのアリーさん  
⑥ミャンマー(ビルマ)移民の子どものための学校

## シーカー・アジア財団 国境地域の教育支援 カレン族の生きる道

この10年で、ターク県の教育状況は改善されてきました。その背景には、国境の治安安定のための同化政策という一面があります。しかし、地域の発展は、住民

## プロジェクトの風景

a Scene of Our Project

「許せない。だけど、向き合えないといけない」カレン族蔑視に対する保育士アリーさんの言葉です。カレン族の保育士をまとめるリーダーであり、管轄する地区行政からも一目置かれる存在です。彼女の視点からタイ国内に約40万人いるカレン族の社会的立場を話してくれました。

「行政の職員でもカレン族をバカにしている人は多い。それまで丁寧に話していたのに、カレン語を一言でも口にしたり、タイ語が少しでもなまったら、なんだカレン族だったのか、と一瞬で目が変わる。それがどれだけ悔しくて、人間として悲しいことか、私たちは痛感している。だから、隠れて暮らしてきた。でも、子どもたちの未来を良くするためには、その事実から逃げないで向き合わないといけない。いつも後輩たちには発破をかけているの。えらそうな役人の前でもはつきり発言しなさいって(笑)」

自身が子どもたちのために良い環境をつくりたいという想いからこそ、始まります。私たちの役割は、進むべき道へ引く張ることなく、当事者が目指す道を進めるようにサポートすることです。アリーさんのように自分の痛みを改革への推進力と変えていける保育士、教員、住民の方々と寄り添いながら、事業を進めていきたいと思います。

(シーカー・アジア財団 松尾久美)



# アフガニスタンの10年

文 三宅隆史（アフガニスタン事務所長）

ジャララバード市に出張する際は、隣国パキスタンの首都イスママバードから国連機を使う。

カイバル峠や美しいヒンドゥークシユ山脈を越えジャララバード



（写真：川畑嘉文）

飛行場に着く。この飛行場の国際線は国際赤十字の専用機と国連機しか飛んでおらず、かつては小さなのんびりした飛行場だった。ところが2004年から米軍による飛行場の拡張工事が行われ、みるみるうちに巨大な米軍基地となった。無人攻撃機、大型輸送ヘリコプターなど米軍の最新鋭の兵器が配備され、滑走路の周りには広大な米軍兵士の宿舎が建設された。

この飛行場は、米軍による東部地域の軍事作戦の拠点となったため、反政府武装勢力による自爆テロやロケット弾の対象となっていた。2010年に飛行場のゲートに2人組みのバイクが突っ込んできて1人はゲートの手前で自爆した。別の1人は逃亡したが、駐車場で逮捕されたところで自爆をし、捕まえた警官が犠牲となった。亡くなった警官は、SVAスタッフの親戚だった。

アフガニスタンはこの10年間、国民総生産は毎年10%も成長しており、経済面は大きく改善した。

しかし、援助の恩恵にあずかりやすい都市部と農村部の格差、富裕層と貧困層の格差は増大し、国民のうち4割は1日1ドル以下の生活を送っている。治安面については、政府・国際治安支援部隊と反政府武装勢力の間の紛争はいまだに終わらないどころか悪化している。紛争によって犠牲となっ

た民間人は昨年3021名を数え、国連がこの統計を2007年から取り始めて以来、最大となった。しかし統計のない2006年以前にも多くの民間人が犠牲になっていると考えられる。

9・11同時多発テロの際、ハイジャックされた機内、攻撃された貿易センタービルにいた犠牲者の合計は3011人であった。アフガニスタン人の市民は、すでに米国の犠牲者の数以上の犠牲を払っている。

米国の無人爆撃機による誤爆、米軍兵士による民間人の家屋の夜間の捜索のため、アフガニスタン国民の米軍に対する嫌悪感は強く、カルザイ大統領もこれらをやめるよう、米軍司令官に何回か抗議している。しかしながら現在8万人いる米軍の2014年の撤退後、アフガン国軍のみで治安維持することは難しいのは明らかである。

そこで、先日、オバマ大統領とカルザイ大統領は、新たな協定を結び、2014年末以降、治安権限はアフガン国軍に委譲するものの、米軍基地の駐留は維持することを合意した。この点は多くの米軍基地を抱える日本、特に基地が集中している沖縄と似ている。

一方、国民はカルザイ政権にも失望している。莫大な援助資金と豊富な鉱物資源の発掘による利益は、政府の腐敗、役人への賄賂をもたらしめている。

米軍にも政府にも失望し、嫌悪感を抱いているアフガン人が反政府武装勢力に共感するのは当たり前と言えよう。国土の7割は反政府武装勢力の支配下にあると言われている。

このような状況の中で、期待されているのは、子ども期に難民として海外に逃れ、海外で教育を受けて、アフガニスタンに帰還した若い世代の人たちだ。英語もできる彼・彼女らの多くは、現在、国連機関やNGOで働いている。軍閥と関係がなく、権利や自由、平等の意識の高い彼ら・彼女らが次の政治的リーダーシップを担うことが期待されている。

SVAが教育支援を始めた2003年から2011年までの9年間に、30の校舎、25の図書室を含む312教室の建設を行い、2万6000人の子どもが安全で快適な教室で学べるようになった。しかし、国全体では年間5000教室の建設が必要とされている。75タイトルの絵本や紙芝居を発行し、73校に図書室を整備し、2600人の教員に研修を行い、11万人の子どもが絵本を読めるようになった。

しかし、この数は国の就学小学生児童488万人の2%にすぎない。アフガニスタンの教育分野の支援ニーズは多く、今後もSVAの責務は大きい。



タイ  
Thailand

シーカー・アジア財団  
自立化推進計画の  
歩み



研修会終了時に圖書の寄贈（ターク県メーソット市にて）

シーカー・アジア財団（以下S A F）は1991年の現地法人化以降、タイのNGOとしてタイ国内の開発援助事業を担ってきました。30年近い経験から、幼児教育、図書館事業の専門

性が高まっており、大学からも講師として派遣依頼がなっています。その一方で、よりSVAから自立した組織運営、タイ国内での資金獲得、そし

て事業運営強化の必要性が高まり、2010年より5カ年の組織自立化推進計画が進められてきました。この計画は、事業管理能力、資金調達能力、経営企画力を備えた事業体としてS A Fが自立することを目的としています。同時にSVA東京事務所では、長年タイ事業を支えて下さった方への計画の説明と継続的なサポートのお願い、S A Fへ引き継ぐ業務の整理、そして定期的な話し合いを重ねながら計画を進めてきました。

2010年5月よりSVAから派遣されたアドバイザーと共に、S A Fではまず事業運営、組織運営面の改善を重点的に実施しました。事業運営面ではS A F職員がP C M研修を受講した後、同手法に則った終了時評価・調査を実施しました。また、専門性が高まっている図書館事業においては、S A Fが独自に事業を継続していくための基盤が整備されてきていることか

カンボジア  
Cambodia  
トンレサップ湖周辺の  
洪水被害小学校に  
対する教育環境改善



新しいノートや鉛筆・ボールペンを手に（トランクラ小学校）

2011年秋に起こった大洪水被害の続報です。カンボジアでもその被害は広範囲に渡り、SVAの事業対象小学校だけでも30校近くに及びました。小学校は10月が新学期ですが、11月中旬から下旬まで水が引かず開校できませんでした。校舎壁面・犬走りにひび割れが入ったり、トイレや井戸などが破損して使えず、一部の学校の授業運営にも影響を与えていました。また、どの世帯も経済的に余裕がない家庭が多く、自身の生活再建と食料確保などに精一杯でした。文具代などを賄うことが一層困難な状況となり、教育状況のさらなる悪化が懸念されていました。

この状況に対し、水害緊急援助の第二段階として、

■総務・国際担当 江口秀樹

4月21日、ラオス事務所日本人職員3人が講師となり、ヴィエンチャン日本語補習授業校で「震災から見えてきた教育の大切さ」をテーマに「世界一大きな授業」を実施。児童、教員、保護者を含め計39人が参加しました。日本でも同時期に同じテーマで開催されていた「世界中の子どもに教育をキャンペン」の一環で、400校以上5万人が参加したものです。

同校は、日本人学校が無いラオスで、英語、ラオス語で授業を行う学校に通いながら、日本語（国語）や算数の補習授業を、保護者の皆さんが協力し資金を出し合って運営している学校です。当日は、小学1年生から中学2年生まで、2つのクラスに分かれて授業を

■所長 伊藤解子

ラオス  
Laos

世界一大きな授業  
at ヴィエンチャン



低学年の授業を担当した仁井職員（左）、鈴木職員（右）

4月から5月にかけて、青年ボランティアグループを対象に、人形劇キャラバン公演研修を行いました。この研修は、毎年、年2回開催されており、今回はその第1回目に当たります。この研修では、2日間かけてキャラバン公演で披露する人形劇をはじめ、絵本を使った読み聞かせ、アクションソング、ゲームの実践方法を学び、繰り返し練習を行いました。各難民キャンプで男女10人ずつ計20人の青年ボランティアグループメンバーが研修に参加しました。その多くは高校と「ポスト10」（高校卒業レベルの学校）の生徒です。メラ難民キャンプで4月18日、19日に開催されたのを皮切りに順次研修が開催されています。

青年ボランティアグループはとて活発で、この研修を通して、さらに自信をつけたようです。研修の参加者から「研修のおかげで自信がわいた。子どもたちが公演を楽しめるように、一生懸命がんばりたい」「研修から多くのことを学べてとても嬉しい。これからは、もっと自分たちのコミュニケーションのために貢献していきたい」という声が上がっています。今年の人形劇の演題は「赤ずきん」です。

この研修後、各キャンプで1日から2日のキャラバン公演を開催する予定です。青年ボランティアグループが難民キャンプの子どもたちに元気を与えています。

■図書館活動調整員  
ブリーダット・タタサナデー

ミャンマー（ビルマ）難民  
Myanmar (Burma) Refugee Camps

人形劇キャラバン  
公演研修を開催



スタッフの実演を見ながら人形の動きを学ぶ

アフガニスタン  
Afghanistan

アフガニスタンから  
出版委員が来日



制作したダミーには色もつけるので構図を確認しやすい

3月に東京でトヨタ財団の助成により児童図書出版についての研修を行なっていました。参加者は、アフガニスタンから来日した児童図書出版委員会メンバー9人、イラストレーター2人、SVAスタッフ3人の計14人です。

作家のやべみつりのりさんを講師に、発行予定の図書のおはなしを基に、ダミーを作りました。原画を描く前に下絵と文の配置を考え、たす作品のダミーを何回も作ることで、絵本や紙芝居の質を良くしていきます。これまでのアフガンの出版では、プロットという映画の絵コンテのようなものが作っていましたが、実際の作品と同じ形態のダミーは作っていませんでした。参加者からは、平和の大切さを伝えるため、悲惨な戦争の事実をどう絵本に表現すれば良いのか、子どもの想像力をかきたてかつ誤った知識を教えないためには、といった質問が出ました。

また、訪問先の童心社で、編集者の役割、仕事については公共図書館の児童サービスを学びました。津久戸小学校（新宿区）では、学校図書室の役割、活動を学び、読み聞かせの見学をしました。

■所長 三宅隆史  
アフガニスタン担当 荻原宏子



# 東北だより

第4報  
2012年夏~秋

いわてを走る  
移動図書館  
プロジェクト



移動図書館をメインの活動としてきた「いわてを走る移動図書館プロジェクト」。2012年に入り、大槌町と陸前高田市に図書室を開設しました。沿岸部を動き回る移動図書館と固定の図書室。形態は違えど、みなさんに本に触れたりお茶を飲んだりしながら交流していただきたいという思いは変わりません。

## 岩手の方たちとつながる 拠点ができました



① かねざわ図書室  
② 陸前高田コミュニティ図書室

大槌町の図書室は「かねざわ図書室」といいます。大槌湾に臨む町の中心部から、山に向かって一本道を約15キロのぼったところにあります。2009年に

廃校となった金沢小学校の校長室と職員室を町のご厚意で使わせてもらえることに。グラウンド内には15戸の仮設住宅もあります。町内でも最も奥まった場所にある仮設団地です。

陸前高田市内では最大の、168戸の仮設住宅が入ったモビリア仮設団地の中にある図書室兼集会所です。自由に使える集会所がなくて困っていた自治会、被災地に図書館を建てたいと考えられていた「アジアの友を支える RACK」の河野太通会長、そして図書活動を広げるために陸前高田市に拠点が必要だったSVA岩手事務所の3つの願いがひとつに。

このような立地条件から、利用していただく方がいらっしやるのか心配でしたが、2月6日の開館以降、お近くの方はもちろん、町の反対側の吉里吉里地区からも来てくださる方がいます。自転車で山をのぼってこられた方がいたのには驚きました。本を借りるだけでなく、金沢地区の昔の様子を聞かせてくださったり、いつも何か食べるものを持ってきてくださったりする方も多く、岩手出身でも20代中心のスタッフにはとても新鮮で、よい刺激をいただいています。

一方、陸前高田市の図書室は「陸前高田コミュニティ図書室」と名付けました。

(岩手事務所 古賀東彦)

## 大震災後、初めてのワカメ収穫

気仙沼市の蔵内地区では、昨年11月に種付けを行った養殖ワカメが、2月に震災後初の収穫を迎えました。「はじまるなー、ついに来たか」と漁師の及川淳宏さん。ただし、収穫は例年のように行かなかったそうです。収穫したワカメの加工をする施設が流されたため、まずはその加工場を作るところからのスタートでした。「自分たちで動かなければ、ワカメは待ってくれない」と仲間の漁師ら4人と協力し、3月に加工場を作りあげました。「漁師に戻ることができた。応援してもらったこれまでの恩は忘れないようにしたい」と語ります。

—気仙沼事務所 里見容



## それぞれ の 3.11



2012年3月11日気仙沼市主催の追悼式

◎1年前、私は街が流されていくのを見ていました。あの日から、この地域に住む多くの人々の人生が変わりました。私もその中のひとり。生き残った人間として人の役に立ちたかった、その思いが多くの仲間とめぐり合わせた。そんな1年でした。

◎あの日、私は連絡の取れない家族を捜し、暗闇の中、瓦礫が散乱する浜辺をさ迷い走り続けました。ただただ必死だったあの日。あれから1年。2012年3月11日、私は遺族代表の言葉を述べるため、市の献花台にいました。

私達家族は、母を失いました。2000人を超える遺族の前で母へ伝えたのは、今被災地に携わる自分の思い。

避難所から仮設へ移り、この1年で様々な人に出会い、たくさんのお優しさをもらいました。数え切れない、多くの人のやさしさの上に今の自分があることを実感していると、そう母に伝えました。

活動はまだまだ続く。被災地を変えられるのは今しかないという思いで、日々仲間とともに活動に取り組

◎1年前、私は街が流されていくのを見ていました。あの日から、この地域に住む多くの人々の人生が変わりました。私もその中のひとり。生き残った人間として人の役に立ちたかった、その思いが多くの仲間とめぐり合わせた。そんな1年でした。

(気仙沼事務所 笠原一城)

来の自分たちに宛てたメッセージを書きました。世界にたったひとつだけの思い出の画集です。10年後、「心の傷は消えていますか?」とつぶやいた子どもがいました。

SVAは、子どもたちの悲しみや経験が、優しさや勇気にカタチを変えて未来の彼ら自身へつながるよう活動していきます。夏に埋める予定のタイムカプセルで、好きな言葉を記入する欄には「やっぱりあれだよね!」と顔を見あわす女の子たち。たくさんの「ありがとう」が書かれていました。

—気仙沼事務所 東さやか

## 子どもたちの絵本ができあがりました

2011年12月の冬休みから大谷小学校の子どもたちと共同で制作してきた絵本『ふんぶん谷』が完成しました。人の弱さや強さ、喜びや悲しみ、自然と人間が共に生きる様子を描き、未来へのメッセージが含まれています。

絵本は、被災地の図書館や学校などに配布し、多くの方々に読んでいただけるようにしています。

また、鶴見大学で行った学習支援「春のまなび一ぱ」では、画集の表紙づくりを行いました。白紙の表紙に子どもたちが飾りをつけ、「10年後のぼくわたしへ」のページには、将







も登場しました。シルクロードを想わせるビーズを使った繊細な手編みレースのネックレスや、男性にも人気のでそうなラピスラズリの携帯ストラップもおすすです。

すべてはアフガニスタンの女性や、障がいがあるために他で仕事をするこの難しい男性たちの手仕事です。クラフト生産の収入が家族の生活を支えています。

いまだに紛争が続くアフガニスタンですが、そこには私たちと何一つ変わらぬ普通の人々による普通の日常生活があります。子どもたちにご飯を食べさせるため、生産者の女性たちは今日もクラフト制作をしています。渡航が困難で日本への輸送も費用がかかるため、継続的に製品を購入し日本で紹介しているのは今のところSVAクラフト・エイドだけです。

安井さんの夢はもっと注文が増えて生産者の女性たちにさらに仕事を回せるようにすること、そして将来的には日本のデパートでアフガンのクラフトが置いてもらえるようにすることだそうです。

クラフト・エイドの今年のテーマは「フェアトレードでつながる」。

可愛いしあわせくまちゃんマスコットや、レースネックレス、ラピスラズリのストラップを身に付けて、遙か遠いアフガニスタンの生産者たちとつながりませんか。

国内事業課クラフト・エイド担当 藤川和美

(写真4点：安井浩美)



### クラフト・エイドで アフガニスタンと つながる



クラフト・エイドは2009年からアフガニスタンの手工芸品を紹介しています。

今年は新製品がたくさん届きました。生産者パートナーは「シルクロード・パーミヤン・ハンディクラフト」という工房で、共同通信のジャーナリストでもあるアフガニスタン在住の日本人女性・安井浩美さんが代表です。

安井さんの持論は「刺しゅうや手織物はアフガニスタンの伝統文化。できて当然」というもの。しかし、この伝統文化も四半世紀を超える戦乱によって破壊され、戦後の貧困のために食べていくのがやっとの人々に、刺しゅうや織物をする余裕はありませんでした。消滅の危機に瀕していたアフガン伝統文化の復興と維持のため、そしてまた、貧困にあえぐ女性たちに仕事の機会を提供するために、シルクロード・パーミヤン・ハンディクラフトは設立されたのです。

工房で作られる品々は、手織りや手刺しゅう、ビーズ細工といった伝統技術を利用し、アフガンの香りを残しながらもセンスのよいおしゃれな作品ばかりです。

人気商品のアフガンピースベアは、多民族国家アフガニスタンの様々な民族衣装を着た男の子と女の子ベアのディベア。アフガン文化を紹介するために実際の民族衣装のミニチュア版を身に付けています。「ピースベアは可愛いけれどもちょっと高くって」という方には、今年はお手頃価格のブルカを着た小さなくまちゃんのマスコット



## シヤンテイな 人たちが Shanti

58  
滝澤  
善五郎・佳子  
Fukisawa  
Zenjoro & Yoshiko  
たきざわ ぜんごろう  
よしこ

### アフガニスタンの子どもたちに教わった教育の大切さ

「子どもたちの笑顔を見て、教育の大切さをあらためて実感しました」

長野県・善光寺の門前町に位置する松葉屋家具店の店主・滝澤善五郎さん、佳子さん夫妻が「アフガニスタンに学校を建てよう」と決めたのは2009年2月。江戸末期から創業した老舗家具店だが、毎年春と秋には、イランの遊牧民の手織り絨毯「ギャッペ」の展示会・即売会を行ってきた。

そんな中、「お客さんと一緒にあって、何か形になるものが残せたらと思いました」という滝澤さん。ギャッペの売上の5%を寄付し、SVAを通して4教室の校舍建設をすることにした。

こうして滝澤さんは、4月下旬

からの約40日間、目標額を集めるため無休でギャッペ展を開催した。草木染の優しい色合いで見入る人を惹きつけてやまないギャッペだが、一枚運ぶのも重労働。折しも、善光寺では7年に一度の「御開帳」の最中で、道行く人に募金を呼び掛けた。「忙しくて、わけがわからなかったですね(笑)」。

「何かやりたいと思っていたの」「松葉屋さんがやるというのなら」と、お買い物や募金など、様々な形で協力してくれる人の輪が広がった。アフガン支援を行ったことで、「お客さんが喜んでくれま

した」。

そして翌年1月、対象校であるシヤヒド・アダム・カーン小学校の建設工事が始まり、7月末に竣工。10月、新学期を迎えた子どもたちが新校舎に登校する姿を収めたビデオが、滝澤さんに届いた。

「立ちすくみながら、見ました」と佳子さん。クリーム色の壁に水色の柱の新校舎。教室で大きな声で勉強する子どもたちの姿に、涙がこみ上げてきた。

「子どもたちの笑顔を見て、教育の大切さをあらためて実感しました。状況がどうあっても、ご飯を食べるとか、教育を受けるとい

せめて何かご縁があった人の力になりたいと思います(善五郎さん)。

学校建設完了後も何かできればと、滝澤さんは引き続き、同校の図書室設置と紙芝居出版の支援を決めた。

「お母さんや身近な人に絵本を読んでもらうのは、私たちにとっては当たり前なことですが、アフガンではそれが当たり前にありません。子どもたち

に、絵本や紙芝居を通してこの幸せを味わってもらいたい。それが平和につながればと思います」。



(上) 滝澤さん夫妻と出版した紙芝居「白いパン」  
(中) シヤヒド・アダム・カーン小学校  
(下) 「ギャッペ」をゆっくり選べるよう展示された店内

### 休みの日は、 ちょっと一息...

アフガニスタンをもっと知りたいあなたへおすすの2冊をご紹介します。



【私の大好きなアフガニスタン】  
安井浩美著・写真(あかね書房)

SVAクラフト・エイドの生産者団体代表の安井浩美さんが、アフガニスタンで出会った子どもたちを写真と文章で綴っています。パーミヤンで生まれ、戦火を逃れてアフガニスタン北東部を家族と転々としたサブジナ、難民として暮らしたタミン、地雷の被害にあったバルワナ。1993年に取材でアフガニスタンに入り、長く住んでいる安井さんならではの目線で描かれています。子どもでもわかるように書かれています。読みやすく、アフガニスタン入門書として楽しめます。



【一人の】  
2012年1月号  
特集 イスラム教入門  
(KKベストセラーズ)

アフガニスタンの生活にはイスラムの教えが根づいています。日本では親しみが薄いイスラム教ですが、同じ信徒を大切に、助けあうように説いています。その起源から教え、戒律、生活に至るまで、イラストと写真で詳しく解説した特集で、わかりやすく読み応えがあります。

(広報課 清野陽子)



# SVAからのお知らせ

## 2012年度 通常総会を開催

公益社団法人へ移行後初の年次総会が、3月24日、真生会館（新宿区）において開催されました。前年度事業報告とあわせ、全会一致にてご承認をいただくに至りました。

2011年度は、SVAがカンボジア難民救済を目的に組織を設立してから、30年の節目であり、活動を支えて頂いたご支援者に対して感謝を伝えていく「かけはしプロジェクト」を展開、12月10日

には記念式典とシンポジウムを開催させていただきます。

また、3月11日に東日本一帯を襲った大震災と大津波の被災者支援に、組織一丸となって取り組みを行った年となりました。人々の暮らしの再建を支えていくための支援活動は、2012年も全国各地の会員、協力者の方々とともに継続していくことを確認いたしました。

海外においては、9・11同時多発テロ以降、10年間にわたるアフガニスタン東部ナンガハール州での活動の成果を踏まえ、2012

年からは対象地域をカブール州へと移行させていくことが承認されました。

一方で、2007年度ラオスでの「南部少数民族の子どもたちを対象とする補助教育教材の制作・配布事業」に一部不履行があったことが発覚。総会では、調査し判明した事実について説明するとともに、理事、職員一同よりお詫びをいたしました。費用を一般正味財産から手当てし、事業の再執行することを承認いただきましたが、会員からは、「業務が不履行を修正しようとしたが上手くいかず、

今となっては発覚したこと。そのことを知らされた私たちの気持ち、SVAを信ずる想いは、深く傷つけられてしまったということを感じてもらいたい。これを忘れることなく、今後の教訓として生かしてもらいたい」とのお言葉をいただきました。長年にわたって信頼頂いてきたSVAに対する想い、叱咤の言葉の意味を重く受け止め、再出発してまいります。

会員、ご支援者の皆さまにおかれましては、引き続きお力添えを賜りますようお願い申し上げます。  
(事務局長 関尚士)

## 2012年度スタディツアーのお知らせ

20周年を迎えるラオスでSVAの事業。ラオスの活動地を実際にご覧いただき、SVAの事業をより深くご理解いただくためのスタディツアーを行います。詳細は同封のチラシをご覧ください。みなさまのご参加をお待ちしております。

◎海外事業課ラオス担当 木村万里子

## SVA夏募金実施中!

SVAの海外での活動を支える「アジア子ども募金」に、ご協力をお願いいたします。同封の郵便払込票も募金にお使いいただけます。

◎広報課 清野陽子

## 気仙沼事務所でボランティア（会員限定）

この度SVA気仙沼事務所にてSVA会員の皆様を対象としたボランティア参加プログラムを企画いたしました。被災地の方の声を聞き、思いを受け止めて活動していただける方のご応募をお待ちしております。

期間：2012年7月4日（水）～8月28日（火）

毎週水曜～火曜の1週間単位での滞在（1週間以上の滞在も可能）

活動内容：気仙沼市本吉地区、唐桑地区の避難所、仮設住宅、地域集会施設などにおいて、寄り添いを目的とした場づくり、イベントのお手伝いなど

参加資格：SVAの会員であること（同行する友人、知人も）  
※交通費、嗜好品は自己負担となります

問い合わせ：☎03-6457-4585（月～金曜日 10:00～18:30）

担当◎会員・ATS担当 野口早苗 国内事業課長 神崎愛子

## 人事のお知らせ

入職	香川 進司	経理・総務課 データ管理及びIT管理担当 契約スタッフ（3月1日付）
	村中 一欽	岩手事務所 図書館活動プログラム担当 契約スタッフ（3月3日付）
	竹谷 麻莉子	カンボジア事務所NGOジュニアプログラムオフィサー（3月13日付）
	貝澤 麻衣	カンボジア事務所 契約職員 （5月15日付）
退職	北嶋 友一	経理・総務課 データ管理担当 契約スタッフ （4月30日付）

## スタッフのひびく

SVAに  
来る前は

映像制作会社に就職したものの、早くに海外ボランティア経験を積みたいと日本語教師の資格を取りバンコクへ。日系企業等で指導しました。その1年後にはスラムで活動するドゥアン・プラティープ財団でのボランティアが実現し、約3年間お世話になりました。スラムが私のNGOへの出発点となりました（海外事業課長 中原亜紀）

栃木県宇都宮市で薬品メーカーに勤務していました。実家で安定した生活でしたが、「何かやり残した気がする」と思い立ち東京に出てきました。家族には反対されましたが、私の根拠なき前進力に押され、最終的には引越越しも手伝ってくれました。10年ほど前の話です。（アジアの図書館サポーター兼会員担当 野口早苗）

カンボジアで約3年間、アセアン諸国の専門家等と農村開発に関わり、識字教室の運営に従事しました。その後アジアの陣がいがある子どもたちの教育に携わり、タイにも2年間滞在しました。自分の物差しだけで測ろうとしてはいけないことを、海外生活で教えてもらいました。（海外事業課 塚本真衣子）

編集後記 ■各国の写真の管理もしています。白い雪を抱く山脈、石の大地に萌える緑の鮮やかさ、くっつくのない子どもの笑顔。アフガニスタンの美しい写真を見るたびに、1日も早く平和が訪れ、落ち着いた生活ができる日が来ることを願わずにはいられません。（清野陽子）

公益社団法人  
**シャンティ国際ボランティア会**  
〒160-0015  
東京都新宿区大京町31 慈母会館2・3階  
TEL 03-5360-1233  
FAX 03-5360-1220  
WEB <http://www.sva.or.jp>  
E-Mail [info@sva.or.jp](mailto:info@sva.or.jp)  
郵便振替 00150-9-61724

● 当会へのご寄付は、所得税、住民税および法人税、相続税の優遇措置が受けられます。

「シャンティ」は、FSC®森林認証紙にノンVOCインキ（石油系溶剤0%）で印刷しています。

ミックス  
責任ある木資源を  
使用した紙  
FSC® C009309